シルボパスチャーで森と牛を未来へつなぐ

北海道帯広農業高等学校　酪農科学科　２年　柿野　るいか

さらさらとそよ風が森を吹き抜け、木漏れ日が牛の背を優しく照らす。耳をすませば小鳥の声、木の葉の揺れる音、牛が草をはむ音が聞こえる。遠くには新緑のかおる森でまどろむ淡いブラウンの牛が見える。私はそんな風景のなかで育ちました。

我が家にはブラウンスイスが6頭、皆のリーダーである11歳のマーヤ、角がきれいな9歳のやっちゃん、マイペースな4歳の小麦、元気いっぱいな3歳の小毬、フサフサな毛並みの2歳のラピス、好奇心旺盛で賢い1歳のレタラ、みんなのんびりと過ごしています。

私の両親は北海道網走市で、とても小規模な酪農家を営んでいます。限られた中山間地域で酪農にチャレンジし、父は山の管理やツアーガイド、母は牛から頂いた牛乳でバターやチーズ、お菓子作りも行っています。牛乳はコクと旨味があるのにさっぱりとしていて飲みやすく、チーズは放牧した牛乳特有の淡い黄色をしています。牛は晴れている日は夏でも冬でも、山に林間放牧［シルボパスチャー］をしています。

林間放牧とは言葉通り森に牛などを放牧して育てるもので、効率化が進む日本の酪農業において、実践している酪農家がほとんどいない飼育方法です。

私は、両親と共にこの風景を守り、森と共生する持続可能な酪農として林間放牧を続けていきたいと考えています。そのため広大な圃場や演習林を持ち、酪農についても専門的に学べる帯広農業高校への進学を決めました。

林間放牧にはメリットがあります。1つ目は地球環境、森林、生態系にとてもいい点です。

その中でも特に温室効果ガスの削減に効果的です。森林を活用して放牧を行うことで、一般的である木のない放牧地に比べ、５～10倍の炭素を吸収することができます。また、牛が下草を食べることで森の保全につながります。父が間伐を行い、整備した森は、植物が生育しやすくなり、広葉樹や牧草が豊富にある里山のような森になりました。

2つ目に牛の健康、体重増加にもメリットがあることです。

森林では木々が日差しを遮り、体感温度は5℃下がります。近年は北海道においても猛暑による影響が深刻です。畜産の授業でも北海道で熱射病が原因とされる死亡牛が昨年度急激に増えたと学びました。林間放牧では牛の暑熱ストレスを抑制し、夏場においても健康的に過ごせます。また、草と木の葉を食べることができるため、通常より餌が豊富にあります。特にマメ科の低木に含まれるタンニンには、牛の第一胃のタンパク質分解を保護する働きがあります。それにより牛が吸収できるタンパク質が増えることで、体重の増加が期待できます。

我が家の牛は、子牛の頃から放牧しているため足腰が丈夫です。一般的な酪農家であれば年に2回程度実施している削蹄の必要もなく、病気や怪我をすることもありません。幼い頃一緒に過ごしたケリーちゃんという牛は、17歳まで生きました。今、最年長のマーヤも11歳になりますが、まだまだ元気いっぱいに放牧地に駆けていきます。このことからも私は、牛を長く健康に

飼育する方法として、林間放牧は最適だと考えます。

3つ目に林産資源を得ることができる点です。森は豊かな資源を与えてくれます。我が家も森の恩恵を受けて生活しています。春には山菜を、秋にはコクワや山葡萄をよく食べています。そして、間伐の際に出たカラマツは、薪ストーブに使うことで薪の自給を行っています。森は守るだけでなく活かすことで、私たちの暮らしも豊かにしてくれます。

このように利点の多い林間放牧ですが、適正頭数で飼育しないと森林に負荷をかけてしまいます。我が家では過度に頭数を増やさず、我が家の森を使って母のお菓子を提供する［森カフェ］を行っています。お客さんに林間放牧について知ってもらう場所にもなっており、美しい森の中で牛とふれあい、その牛の牛乳を使ったお菓子を味わうことができます。このように生乳に付加価値をつけた販路構築を行えることも、林間放牧の魅力の一つだと思います。

また、放牧地の細部まで目が行き届かない、牛の状況が把握しにくいといった課題もあります。そこで私はトレイルカメラの導入を提案します。トレイルカメラを用いることで放牧地の管理を容易にし、牛の行動を把握することができると考えます。これを我が家にも導入することで、脱柵や木の倒木など放牧地の状況を把握することができ、森の管理や保全につながると考えています。

ですが、林間放牧は日本ではほとんど普及していません。今、林間放牧が行われている土地は、世界の放牧地のわずか4%しかありません。2050年までにその面積が6%に広がれば、二酸化炭素を約31,2GT、世界の一年間のCO_2排出量とほぼ同量が削減できるのです。これは、ベストセラーの著書、「ドローダウン；地球温暖化を逆転させる100の方法」で第9位に位置づけられるほど高い効果と実践が期待されています。

日本は国土の7割が森林です。管理されず荒廃している森も数多く存在します。私は、日本こそ林間放牧に向いていると考えます。私は今、両親の牧場や森の管理を手伝っています。そこで林間放牧による酪農について両親から日々学んでいます。さらに林間放牧以外の森の活用方法について理解を深めるため、「森のようちえん」主催の講演会に参加し、森が人に与える影響について学びました。インターンシップでは豚の放牧を行っている牧場を訪問し、牛以外にも林間放牧が効果的であることを学びました。また、今年の夏は長期休みを利用しモンゴルへ研修に行きました。放牧の原点である遊牧を学ぶことで、環境に適応した農業をすることの重要性を再確認することができました。今後も、帯広農業高校生であることを活かし、様々な牧場に研修にいきたいと考えています。

そして、卒業後は経験を積むために、シルボパスチャーの取組が進んでいるヨーロッパの国々へ研修に行きたいと考えています。そのため帯広農業高校で酪農について実践的な知識だけでなく英語力も身に付けていきたいと考えています。

大好きな牛たちと我が家の森が与えてくれた私の夢。森と共生する牧場を持ち、その魅力を様々な人に発信すること。私は将来、林間放牧を引き継ぎ、私の夢を叶えます。そして、酪農とは牛乳を生産するだけではない、もっと大きな可能性を持っていることを沢山の人に伝えていきます。

環境によく、牛にも優しく、林産物を得ることもできる。そして、森と牛を未来へつなぐシルボパスチャー。私は森と共に生きる酪農家としての未来を実現します。